

昭和四十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第二八八号）

慈

光

第二十五卷

第五号

次

濁世動乱と親鸞聖人……………近角常観……………(1)

師を求めるところ(一)……………信国 淳……………(5)

一道会の記(二)……………榊原徳草……………(10)

目

念仏詩抄……………木村無相……………(17)

明日への不滅の希望……………花田正夫……………(20)

濁世動乱と親鸞聖人

近角常観

世界の動乱やら、我国の現状やら、宗教界の有様やら、何れの方面を見てもすこぶる不徹底な姑息的（こそくてき）な気分がみち満ちてある。一言にして云えば如何にも末法濁世の有様が自然に發展されて行くかの如く見ゆる。

かく言えばすこぶる悲観したる観察のようであるが、併し、ここにすこぶる力強き心、強き感じをなすものは、独り親鸞聖人の真宗なるものが存在することである。そもそも親鸞聖人が真宗末代の明師と言わるる点はこれである。

親鸞聖人の教はあだかも不倒翁（おきあがりこぼし）の如くである。大いなる動揺に出遇えば出遇うほど、ますます重力の中心に立ち返って起き上る教である。

経道滅尽（けいどうめつじん）ときいたり、如来出世の本意なる

弘願（くわん）真宗にあいぬれば、凡夫念じてさとりなるなり

実に五濁悪世、法滅百歳の教ということが、畢竟、世が

うちに処しつゝ、優にこれを救済し、これを摂受し得べき真実なる徹底的の教である。

像末五濁の世となりて、釈迦の遺教かくれしむ

弥陀の悲願ひろまりて、念仏往生さかんなり。

超世無上に終取し、選択五劫思惟して

光明寿命の誓願を、大悲の本としたまえり。

いかにも堂々たる大音宣布である。実に現今の如き濁悪動乱の時世においては、自から清浄にすべし、真実にすべしと教えたところで実際に行われぬことである。

現今仏教各宗の形勢が徒らに、世間に同化することのみに勉めて、自己の立場を破壊しつつあることをさとらぬ。

自分では余程開化した積りであるかも知れぬけれども、世間から見れば像末五濁の世となりて、釈迦の遺教かくれたまう感をまぬかれぬ。親鸞聖人も

釈迦如来かくれましたまして、二千余年になりたまう

正像の二時はおわりにき、如来の遺弟悲泣せよ

と言われたもこれである。慷慨家としての親鸞聖人などあまりに感心した観立てではなけれども、悲歎述懐に自己の悲歎述懐と共に、当時の南都北嶺に対して、いささか洩らされたもこれである。ただに宗教界のみならず当時の

末になる程かがやく教であるということである。

全体時機相應の要法ということが是である。しかるに現今の真宗なるものが、悪人正機じゃ、時機相應じゃと云うて、畢竟、悪人のままでよい、肉食妻帯は時勢に適切である位な見解をもって、徒らに時勢に順応し、世間に妥協して遊泳して、平気な顔で居るは、時機相應の要法ではない、時機そのままの俗法である。悪人救済でなくして、悪人免許の邪法である。

いささか言葉が奇矯にわたるようであるけれども、親鸞聖人の真実なるものは、決してそのような力の弱きものではない。全体、末法に至るほど、弥陀の本願盛んなり、というような確信ある、むしろ大胆とも云うべきお言葉のあらわるるにはそれだけの確信が無くて言えるものか。外界に順応するが真宗の特色ではない、むしろこの濁悪動乱の政界に対しても、短刀直入に喝破せられたる『教行信証』の後序の法然聖人ならびに弟子の流罪に対する論断の如きも大経五悪段そのままの文面である。

かく言えばとて、すこしも親鸞聖人の眼中に当時の時世を相手にして、かれこれ一言もいわれぬ。各宗に対する態度とても、すこしも是非善悪の論議にはわたらない。五濁悪世はやはり五濁悪世である。勿論自分も五濁悪世の一人である、否、代表者である。他人は悪いが自分は善いというようなことは、聖人の口から一言も聞いたことがない。

しからば全体聖人の特色は何処にある。唯この五濁悪世において、その五濁悪世を救わんがために現われたまう弥陀の悲願を弘宣せらるる一点にあるのである。

五濁悪時悪世界、濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ、恒沙の諸仏すすめたる。

即ち濁悪邪見の我等を、飽くまで救い、飽くまで恵まんとて、光明無量寿命無量の大慈大悲の如来あらわれ給いて、真心徹底の一念に、流転迷妄の禍根を断絶する真実教を宣伝したまいたるが、弘願真宗である。真無量も、真実教も、真中之真もみなこれである。聖徳太子の靈告に、親鸞聖人を礼せられて、

五激惡時惡世界中、決定即得無上覺也

とあるのも畢竟聖人の真宗の特色を讃仰せられたる言葉である。

全体かくの如く、真宗、否、宗旨的真宗ではない、弘願真宗、即ち如来の真実宗の特色として、力説すべきところは、五濁惡世の不真実を飽くまで救うところの真実である。なお詳しく言えば、如何なる濁惡不実といえども、その不実をしりぞけず、何処々々までも大慈大悲の心を持ちて見捨て給わざるが故に、如何な不実なる者も、終に頭がさがるまで変らざるのは徹底的の真実である。即ち無限の真実である、これが如来の真実である。この真実によりて五濁動乱の間において光明をみとめらるるのである。波乱多き人生において救済の船を見出すのである。

無明長夜の燈炬なり、智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり、罪障重しとなげかざれ。

なおここに大いに注意すべき点は、真宗の教は、一面五濁動乱の間に処して、しかも流転輪廻の禍を絶するといふ点にある。「煩惱を断せずして涅槃を得る」と共に「即ち横ざまに五惡趣を超越(ちようさい)する」といふ点に存するのである。

浄土真宗に滞すれども、真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらに無し。

外儀げいのすがたは人ごとに賢喜精進現せしむ
貪瞋邪偽かみんおおきゆえ、奸詐かんともはし身にみてり。

悪性さらにやめがたし、心は蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに、虚仮の行とぞ名づけたる。

無慚無愧のこの身にて、まことのところは無けれども
弥陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみち給う。

小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずば、苦海をいかでか渡るべき。

蛇蝎奸詐のころにて、自力修善はかなうまじ

如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん。
実に反覆、感泣すべき金言にして、真宗末代の明師と渴

仰雨涙を禁するあたわざる次第である。

△大正七年四月、求道より▽

とかく不断煩惱じゃと云うて放任主義におち入りて、たとえ煩惱ありといえども横断四流の一念に、生として受くべき生なく、趣として到るべき惡趣なきにいたる、動乱迷妄の禍根を根絶する弥陀の利劍の働きを忘れてはならぬ。

若しこの迷いの根を絶つ一念なかりせば平和の源泉はない。涅槃の常樂はきたらない。宗教としての価値もなく、仏教としての目的を脱することになる。親鸞聖人が「涅槃の真因は唯信心を以てす」とか、「寂靜無為の樂(みやこ)には必ず信心をもって能入とす」と云われたがこの点である。実に真宗の真宗たるところは、この徹底的の一念に存するのである。

若しこの一念を存せずして悪人正機を云い、時機相應を談ずるならば、あたかもさしを結ばずして銭をつなぎ、底なき袋に水を盛るが如くである。いつまで経っても満足喜悅の人生は実現せぬであらう。

かく云えばとて真宗の教は現世において我等を仏たらしめ、この世を浄土たらしむるものではない。却つてこの救済の一念あつてこそ、如何なる五濁動乱の中に処して、如何なる虚仮不実の我等も懺悔しかつ感謝して起居動靜が出来るのである。聖人の悲歎述懐にも

△推薦図書▽

懺悔録

近角常観 著

定価 三五〇円 送料 七〇円

発行所 京都市左京区高野泉町四〇 文明堂
振替 京都七七三四番

第十四版、序。

本書は私が入信の実験を披瀝して、阿闍世王の煩悶得信に比較し、歎異抄第二章の聖人告白の聖訓を鑽仰したつもりでありました。しかるに教行信証にこの阿闍世王慚愧の追繫経の文を引用せられたるところは、むしろ信後の悲歎として、その劈頭に「誠に知りぬ悲しい哉愚禿、愛慾の広海に沈没し名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることを喜ばず真証の証に近づくことを快しまず、恥ずべし傷むべし」という御述懐があります。全く歎異抄の第九章の聖訓と符合するものであります。回顧すれば私の懺悔も、入信の告白と同時に亦信後のこの講話をした時自身の告白たりしことを想到し此書は私の一生涯を通ずる懺悔録であります。云々。

昭和元年十二月、常観識す

師を求めるところ(一)

信 国 淳

司会 今日信国院長先生を囲み、「師を求めて」というテーマでお話頂きたいと思えます。「人が真に生きる」という時、そこにはどうしても「師に会う」ということが大切のように思えます。…先ず先生に御自身の歩いて来られた人生の歩みを話して頂きたいと思えます。

△ゆきちがいということ▽

院長 師を求めてということですが、私が自分の生涯をふりかえてみますと、結局師を求めて半生を過したということになっていたようです。

プーバーの著わした自叙伝風の書物に「出会い」があります。お読みになった方もあるかと思いますが、プーバーがものごころついたときに、既にお母さんがいなかったんです。お父さんとお母さんの間が不仲になってお母さんが離婚された。プーバーを生み落として間もなくお母さんはお父さんのもとを去ったのでないですかね。そういうことで幼少の頃プーバーは、お母さんがいつ

そこです、ゆきちがいと出会いということ。そういうことはたんにプーバー一人だけ関係したことではない。たんに一個人に関係したことではなくて、人類全体にわたる問題であると云っておるわけです。

で、私が師を求めて半生を過してきたということは、やはりそういう人間と出会いながら、いつも行きちがいばかりしていて、本当の出会いがほとんど不可能だという問題があるんです。不可能だけれども、その出会いが全うされなければ人間は救われないという問題ですね。この問題を如何にして解決するか。つまりそういう問題を克服して、そして人間と人間の出会いをどこで成就するか。私はそういう出会いの成就をたらず教えを求めた。出会いを教える先生を求めて来た、今日になって言えるのですよ。

最近になっていよいよ思うことですけれども、人間一衆生といってもいいんですが、一応人間として限定するならば、一切の人間とはもともと一体なんでしょうね。もともと生命において一体なものが、個々それぞれの違ったかたちをとって分裂している。しかし分裂したままで実は統一されている。だから分裂した私達は、その未来的な統一に帰らなければ、人間として生れて来た生命の意義を尽くすことが出来ないのです。

か自分のもとに帰って来るんだと思っていた。ところが或る時ふと、三つ年上になる女の子から、あなたのお母さんは帰って来ないのだよと、こういわれたというのです。それがプーバーの幼い魂に深い傷を負わせることになって、心に深く感銘づけられ、後になってプーバーは、「ゆきちがい」という言葉で言いあらわすことになるのですが、それは、母と自分がこの世にあって、母と子という深い縁に結ばれているにもかかわらず、その母との出会いが成就されなかったことを「ゆきちがい」——人間と人間との間における出会いの欠如、それを「ゆきちがい」という言葉で領いたわけでしょう。プーバーは三十代かな、奥さんをもらい、子供をもうけて後にそのお母さんに会ったわけですけれども、その時に若い頃「ゆきちがい」という言葉で領いたものを思い出して、その言葉がプーバーの内に新しく甦ってきたことを、確か「出会い」の最初のところに、「母」という題で書いていると思う。

そこで、その分裂した人間の全体を統一している根源ですね。その根源まで帰り着くことが、師との出会いによって始められ、師との出会いによって成就される。もしそれが成就されぬとなると、あらゆる出会いがすべてゆきちがいに終ってしまふ。こういうことがあることを最近つくづく思うわけです。

そういう人間の究極の出会いの場所が、親鸞聖人の教えに依れば「浄土」ということばで云い表わされているわけです。だから私は、浄土を教えて下さる先生を求めて半生を過ごしてきたんだと、そんなにも云えると思うのです。

△あいあらそう現実▽

もちろん私自身がそういうことを、必ずしも意識的に求めて来たわけではありませんけれども、結果的にみればそういうことになっていることに今日気付くわけなんです。しかしそうして私が、私達の自他の全体的統一というものを、また統一に到る道というものを教えてくれる先生を求めて来たということには、私自身にやはり問題があったのです。しかもその問題は、私のきわめて幼少の時に、既に私自身の経験として私の上に表われてきたと云っていいと思う。

— 自分の記憶を辿ってみますと、大体自分自身に関する記憶が四つの時から始まっているようです。その四つの時に

属する記憶は、全くたわいのないものなんです。三つ四つあるのですが、例えばやっと一人で便所に行けるようになったんでしょか。便所で足を踏みすべらしましてね、こえつぼの中におっこちたという。そして父だか母だかに引っぱり出されて、木で造ったたらいの中にお湯でも入れて貰ったかな、そこでお尻をべちゃべちゃ洗ってもらった記憶がまずある。

それから家のすぐ前に駄菓子屋さんがあって、子供の食欲をそるようなお菓子が並んでいた。どういふもんか初めて動いた盗み心というやつだと思ふのですけれども、盗み心がちよつと出ましてね、三人のわんぱく小僧と一緒にケースの中のお菓子をどつて逃げようとしたわけだ。ところがケースをあけてひよつとお菓手に触れた瞬間ぶるつとふるえあがっちゃって、そして逃げ出したという記憶。

それから、町を太鼓を叩いて廻るチンドン屋さん、その陽気な音楽にさそわれて、後を追うて何処か遠方まで行つたんだと思ふのですよ。そして迷子になつてわあわあ泣いていたんです。すると通りがかりの或るおじさんが「坊や何処だ」と問うわけだ。で私は、お芋屋さんの近くだと答えた。そのおじさんは本当に親切な人で、肩車に私をのせて、一軒一軒お芋屋さんを尋ねて廻つたんじゃないかな。そしてえんやと、ああここだというわけで連れて帰つて貰

はないかと思ふわけです。世間の眼から見ればいかにも仲のいい夫婦らしい、家庭としてもほとんど波乱のない家庭だつたと思ひます。にもかかわらず、私の両親について見たすがたはまさにゆきちがいのすがた、——父は拳骨をふりあげ、母は荷物をまとめてとび出そうとしている。おそらく里へ帰るといつてだだをこねておつたんだろうけれども、それを父が怒つてなぐりかかろうとしている姿、——そういう光景を私はあのあたり見たわけです。

私はたまになくなって、思わずその両親の中に飛び込んだのです。悲しかったと思ひます。自分が間に入ることによつて、——喧嘩をやめさせて、二人が和解出来るとかできなにかいふことになしに、ともかくたまらない、その場にいたたまれないものがあつた。二人の人間が、しかも私の父となり、母となつた男女がいがみ合わなければならぬ、そういう人間の姿にたえられないものがあつたんだと思ふのです。で、まあ理屈なしに飛び込んだのですね。飛び込んで、おやじの勢いにおされて、ぶつたおされて、わあわあ泣いた記憶があります。

この出来事は私の魂に深く刻みこまれたと思ふのです。別に私は、その後それをしょつちゅう覚えていたというわけでもないし、むしろそういう記憶を思い起すのはずつと後になってからのことなんで、特に最近そのことをしきり

つた記憶だとか……、それが大体、私の四つの時だつたと思ひます。

これから話そうと思ふ記憶は、五つの時に属するものだと思ふのです。私は幼稚園に六つと七つの二ケ年間行きました。が、幼稚園に行つてゐる時でない、それよりも前だから、おそらく五つの時に属する記憶だと思ふのです。

それはどういふ記憶かという、私の父と母とがあい争う、父母相剋のすがた、——前後のことは全然記憶に残つていません。どういふことでそういう両親のすがたを見なければならなかつたのか全然わからんのですけれども、ともかく父がこぶしをあげる、げんこつをふりあげる。母がその前で泣き泣き自分の衣類です、着物の類を風呂敷に包んでそれをきびろうとしてゐる。それを父が怒つて、なぐりかかろうとしておつたんだと思ひます。

その後想像してみるのに、父も母も若い時のことで血の気も多かつたでしょうし、なんでもないことくらいさかいはやることがしょつちゅうあつたんだと思ふんです。大体後になつてわかつてきたことなんですけれども、父と母とは性格がかなり違つてゐまして、どうも一生の間もうひとつびつたりといかないものがあつたように思ふのです。

つまりさっきの言葉で云えば、夫婦としてこの世で結ばれたにもかかわらず、その一生はゆきちがいで終つたので

に思い起こすのです。

しかし、私が生涯師を求めずいられたかつたことのために、その記憶が私にとつて一つの出発点となつたということがあると思ふんです。つまりその時見た両親の相剋の姿、——つまり、両親が夫婦として一つの家庭をいとなみながら全然出会つていないということ、ゆきちがいのままで終つてゐるということが、私にはあつてはならぬこととして悲しかったという事実があるのです。だから、そういう出会いが出会いとして成就せずにゆきちがいのままで終つてゐるものが、——そういう人間関係が、どこでどうすれば解決できるのかということ、そういう問題意識が私にもおこるはずなんです。問題の意識とまで云えませんが、私も、そういう姿を見たというその事が、悲しむべき事実として私にも問題になるわけです。悲しい思い出しとしていつもそれが自分の中に残つてゐるわけです。

私自身がこの世に人間として生まれてきて、最初に見た人間の争いのすがた、それがいつしか私のためにそういう争いの世界からどうしたら脱け出せるか、そういう世界をどうすれば克服できるかという問題になつて、私を私の背後からいつもかり立ててきたのではないかと思われま

す。 八人間のあたたかき、きびしき

その後今日の年にいたるまで、私もいろんな人間関係を

経てきたわけですけれども、一番記憶に残っておるのはやっぱり先生なんだ。幼稚園時代の先生はもう全然記憶にありませんけれども、小学校の一年生の時に習った先生から六年になるまでに習った先生に関しては、実にまざまざとした印象を今日までもっておる。

それにくらべると友達の記憶はあまりないんです。自分でも不思議に思うのです。まあその時々一緒に遊んだ友達、仲の良かった友達、仲が悪くて喧嘩した友達等思い浮かべられないことはありませんけれども、印象が淡いんです。ところが先生ということになるときわめてはっきりしてくる。

小学校一年生の時に習ったのは玉木先生という中年の女の先生、ごく優しい先生であったという印象が、その先生の肌さえ感じられるほどはっきり残っている。

二年生の時には遠藤先生。この方はまた若い女の先生で色の浅黒い人であった。この先生の顔もよく記憶に残っています。この先生について特に私に印象深く思い出されることは、この先生は私の倫理生活というものに最初に関わって下さった先生だということ。―私が何かいいかげんなことを云った、何か嘘を云った。そうしたら、それを皆の問題として取りあげて、嘘を言うことはよくないことだとたしなめて下さったわけです。それからその先生を妙に尊敬できる立派な先生だという印象をもったことがあります。

一 道 会 の 記 (一)

榊原徳草

次に花田先生のお話を誌させて頂きます。

先日、フト気がつきますと、池山先生は明治六年のお生れで、生誕百年に当りことさらに今年の一道会は感銘深く覚えます。さて百年という言葉について思い出しますのは、ゲーテの「ファースト」が、百歳になって命終の時、
「本当に美しい、しばし生まれ／＼の言葉を残して天界に引接されるとありますが、先生の百年を迎えて、先生から聞いたこの言葉が去来いたします。

また先生の六十七歳の死の前にされての最後の御言葉はこれは友子奥様が聞き取って下さったもので、
「何も残るものはない、何も残るものはない
唯念仏だけが残ってくれる、唯念仏だけが残ってくれる、偉いこったよ、有り難いこったよ」

と。これが此の世における纏った最後のものと承って居ります。いよいよ死を前にされて、末期の眼に映る仏光の

す。

三年生の時に習った先生は向井というおじいさんの先生でした。この先生を通じて私の知ることのできたことは、人間のもっている暖かさということで、幼い子供にかける愛情の深さ、暖かさをその先生によって初めて知らされた別にそう偉い先生だったとは思わない。教えることも上手だったとは思いませんけれども、ともかくその先生のもっている人間的な暖かさが、私の魂に深く刻み込まれているようです。

ところが四年生から六年生までは教わったのは宇山先生ですけれども、この先生によって私にはじめて先生に反逆する心を身につけられたような気がします。先生を批判する目が、この先生を通じて初めて私の中につくられたように思うのです。三ヶ年間その先生を批判し、反逆し続けながら私は小学校を終えたようです。それから中学に入ったのですけれども、中学に入ると、またぐんと多数の先生と接触する、そしてそこで先生を自分の心の中で選ぶのですね。ある先生をよしとして取る、他の先生はたいした先生でない、つまらない先生だといった具合に先生を選択する、そういうことをずっと続けてきたと思うのです。そういうことで中学から高等学校に入り、やがて大学に入ったわけです。その間やはり先生を求めるといふ態度で関わり合ってきたと思います。(以下次号に続く)

輝き、夕陽が西に沈むとき、天上一片の月が十方を照らすように、この世の一切が夢と消えようとする時、唯念仏のお光りが輝いて、そこに微笑(ほほえみ)と共に、偉いこったよと讃仰と随喜のお声もれたのであります。この御心境は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」との歎異抄のころと不思議というより当然の一致したお言葉で、聖徳太子の「世間虚仮、唯仏是真」と一味であります。

「ただ念仏」とありますについて、これは先生の御講話には必ず仰言ったことですが、先生の四十二歳の時人生の闇黒に到達され、にっちもさっちもならない絶望の底にあって、ひょっこり歎異抄の二章の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の一句が心に浮び、畳の上に金文字となって映った／＼その刹那ああそうか、じゃあ

池山も、と南無と口に出た時、光の滝を浴び、闇がおのずとひらけて、お念仏の中に、ああ、これが信心か、とうなずかれたのであります。

ゲーテの「美しき魂の告白」の中に「久遠の言葉が肉体化してわれわれの心に宿る」とありますが、これを池山先生の御体験からいえば、御念仏で、先生の四十二歳に溲みこんで、その久遠の言葉が肉体化し、それが生涯を貫ぬき最後の「偉いこったよ、有難いこったよ」の讃歎の言葉をもって浄土に還えられたのであります。

そのお念仏の働きを

たのまるる唯念仏のわれにありさるべき業はさもあらば

あれ

とも、また

われならぬきよらのわれのわれにありて穢悪（えあく）のわれをわれにしらしむ

ともたえられました。

このようにして、先生の御一生は念仏のひとり働き、本願力の自然として、御口からもれ、或は行いとなって現れていたのであります。先回でしたか松本先生が仰言った、
「先生のお宅を「遊林荘」と言っていられた」ということに驚かれたとありますが、これは正信偈の「煩惱の林に遊んで神通を現す」によられたもので、先生の御一生は広

ことに私共が深い感動をうけましたのは、三男の幸吉さんが甲南高校生の時、亡くなられる前に念仏に帰られた際の話やら、最初の奥様の胃ガンで亡くなられた時「今生夢のうちのちぎりをしるべとして来世さとのまへのえにし」をお喜びになったこと、或は二男の敏朗さんや末の愛子さまがお念仏されるようになった時の跳り上る程のおよろこび等々は忘れ得ないものであります。

また先生に教をうける私共に何時も「親鸞弟子一人も持たず候」とのお態度は、光も熱もない月が太陽の光をうけて四方を照らすような無心なお姿であった。

この世の親は、膝元に居る時よりも、遠く離れ住むと子は親を慕い、更に死後にいよいよ切に恋い慕いはじめますが、先生もまたこの世を去られてのちに、私共の内からお念仏と共に現われて下さり、何となしに聞き捨てにしておりましたお言葉が深い味わいをもってあきらかになつて、私共の心を照らして下さるのであります。

「なんにもなくなる、なんにもなくなる、

ただ念仏だけが残って下さるよ」

偉いこったよ、有難いこったよ」

そのお念仏は、先生のおいのちである、そのおいのちが念仏とあらわれて永遠に活動して下さる、この世だけでなく尽末来際かけて、尽十方無碍の光明とあらわれて下さる

大無辺な仏の法界に修々自適していられたことを事毎に知らされました。

見るもの聞くもの、人事万般、自然の移り変わる姿まで、先生の眼に映り、耳に聞くもの、すべて仏徳讃仰の色であり声でありました。時にカナリヤの呼ぶ声に、或は犬の遊びに、或は猫の気儘の動きに御自身を見出され、念仏に還（かえ）られた。或は降りしきる雪景色にお慈悲の雪が降るとか或はくぬぎの若葉が光りに向って微動している姿に本願力に引かれ行く衆生を感得して讃えられた。更に新聞に報道される人事問題を縁としても仏徳の讃仰をせられました。昭和の初期、藤原あきさんが主人と子供を捨てて愛人に走ったので非難轟々の嵐に吹きさらされていた際「あきさんも煩惱具足であり、仏の御心には可愛い一人子であり、我々と共通点を持っている。只我々はそうした業縁にあわないから善人振って責めているが、我々もまた業縁次第でどんなひどい業さらしをせぬとも限らない」と仰言ってお念仏していられました。

成は歌謡曲の「天竜小唄」或は「城ヶ島」または道頓堀り小唄の「雨よけ陽よけ、かけたななげを知りやすまい」等々や、有名無名の小説を引用されて仏徳を渴仰していられたのであります。芭蕉翁の「見るもの花にあらずということなし」という趣きがありました。

のであります。この消息は

われなくも法（のり）はつきまじ和歌の浦の 青草人のあらんかぎりは

の聖人御臨末の御書に通じ、また、法然上人の御臨末の近い日、

念仏のあるところ、そこがわが廟所である、死後に廟所など造らぬように、

と遺訓されたことにも通じるものであります。

引き続き松本解雄先生は次のようなお話であります。

年に一回の一道会に参らせて頂きました、爽やかな秋の午後、皆様と共に池山先生の御写真や御筆蹟の掲げであるこの部屋で、念仏のお味わいを皆様と心ゆくまで味わわせて頂く、時恰も京都は紅葉の真只中でありました。先程も京阪電車の四条から河原町まで歩いて来たんですが、恐らく京洛の秋を楽しむ沢山の若人、或は老人達が三三五五として歩いている姿を見て参りました。そして風頃この御縁に出させて頂きました。

私は池山先生には長い間お育てを蒙りまして、この会には大体出席して居り、その都度何か取りとめもないことをお話させて頂きました。今日も別にこれと云ったこともご

ございませんが、我々が曾て下鴨に聖鸞寮を設けて、寮誌を出しましたが、その中に先生の原稿や御講話を頂いておりそれらを集めて「仏と人」と題して出版せられました。この外に「独訳歎異抄」「意訳歎異抄」「絶対他力と体験」「信を行く旅人」などありますが、「仏と人」は先生最終の出版でありました。

この「仏と人」の最初に「大いなる受け入れ」というのがあります。これを最近再読致しまして感じたことは、これは数ある先生のお話の中でも珠玉の一つであると思つたのであります。

さて今日も榊原先生が感激の中にお読み下さった歎異抄であります。かつて慈光誌に榊原先生が紹介して下さいたように「歎異抄が池山先生か、池山先生が歎異抄か」と言われる位、先生と歎異抄は一つに思われるのであります。中でも先生のお話にいつも出てくるのは第二章の「親鸞におきてはただ念仏して……」あそこなんです。あそこが先生の中心と申しますか、一番大切にされました。御著述の中にあつても、この「大いなる受け入れ」これは恐らく歎異抄の第二章に当る御文じゃないかと思つたのであります。そこで、この中の二三の柱とでも申します点について申述べさせて頂きます。

先ず最初に、ニイチエの「超人」の所を出して「然し超

釈迦発遣の声、その勧めによって白道への転向、というところを仰言っておられますが、最後のところへ行きますと、超人を更に超えて仏へのあこがれ、白道への転向、これをきっかけに、仏への憧憬、そこでこちらの動物的なそれと、又超人的なその中に人間というものは挟まれておるといふ事なのですが、その所を「そも／＼超人道と白道とは絶対に相容れないものではない。歴劫迂廻の自力の修行と一念横超の他力撰取と、その方法こそは異なれ、めざす所は究竟向上の一路に帰すべき理由がある」とあります。向上的に上に向って行く自力の道と、片方は仏力他力によっての道との二つの道、仏教を自力他力と二つに分けて言いますけれども、方向は違つても、一に帰するいわれがあると申しておられる。

そういうところから更に石川啄木の歌「悲しきは飽くなき利己の一念を持てあましたる男にありけり」を引用されて、二元的な、しかも白道の一歩手前まで追いつめられていながら、それらの人の中には「東岸の声のついに聞こえずじまいに終る人がある」と悲憫していられます。しかし私共が啄木の歌のように、自己の上に凝らされた眼をもつて、東岸の勧めを聞くことが出来たとすれば「ここは弘誓の強縁の支配する境地である」となるのであります。

——途中で私の感入の心持を申しますと、ここらを拝読

人の道は峻しい、人間は綱である。動物と超人との間につなされた峻崖上の綱である。危ない渡り、危ない道すがら、危ない顧りみ、危ないおののきとたたずみである」とあります。

動物と人間との中間に位する綱、こういうように我々人間というものを先生は見て居られる。ところが次に

「然るに私達は凡人である。万善諸行の如き、真面目に修する心だに起らない。苦惱の旧里は捨て難く、愛欲の広海に沈み、名利の大山に迷いつつある。我ながらいやになつてしまふのであるが、どうにもそれから出られない。超人への綱渡りの如きは思いもよらない」と。この動物的な名利の大山に、愛欲の広海に、我ながらいやになる。

ところが一方においては「超人への歩みを羨やみなしに見ることは出来ない」つまり、一方ではどうにもならない、この〃何れの行も及び難い、地獄は一定住家（すみか）ぞかし〃の私が同時に他方では超人の歩みを羨望している。そこで「何たる奇妙な取合せであるう」とこう仰言っているのであります。

そして次に、あの二河白道のお譬を引いておられます。

「東岸の勧め声は白道への転向である。そしてその転向こそは超人を更に超越して超々人——仏——へのあこがれの実現を可能にする」と。東岸の声に勧められて白道への転向

しつつ、池山先生こそは、東岸の声でないかと思うのであります。一方西岸からは、先程白井先生の仰言つた「汝一心正念にして直ちに來れ」これを池山先生が「オネガイダカラスグキテオクレヨ」と和訓されましたが、東岸の声、お勧め下さる先生と、西岸からの御呼声と、これが一つに融け合つていられる、そういうことを今感じたことなんであります。

そしてこの「大いなる受け入れ」は、先生は「白道への踏切り」と仰言っています。又一方では「地獄一定」ニイチエの言葉では「大いなる蔑視」あるいは「見さげはて」を「大いなる受け入れの前程」と説かれて、あとは白道への転向を述べて居られます。

そしてこの消息を、親鸞聖人と法然上人との出遭いの所に、麗わしい筆で書いておられます。法然上人は四十二才の時の、あの大きな受け入れ「余が如き下機の行法は阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と仏願に信順せられてから幾星霜を経て、すでに六十九才、これに對する血氣盛りの若々しい親鸞聖人との会見を先生は、

「私にとって、無くってはならない人同志の対面、何たるおよそ此の世にあり得る限りの莊嚴な場面であらう」と。両聖人の吉水の禪房における出遭い、実にたとえようのない

い何たる莊嚴無比の情景だったことでしょう。

先生は更に語を続けて「この時、聞く聖人の胸の内は、
〃何れの行も及び難き身なれば〃という二十九年の体験に
成る筈で隅から隅まで掃きつくされて、文字通り空っぽで
あった。成仏への進展に役立つべき何一つも持ち合わせて
いない身の〃とても地獄は一定すみかぞかし〃と背かずに
はいられなかった」説く上人と、聞く聖人と、この所に
「今現に、若しくはかつて体験したものでないもの一つ
もない。聖人のうち明けられる片言隻語、これまた上人の
前半生の体験の内に納められていないものはない。後進は
先達の踵（きびす）について、両者の歩調はびったりと出
会った」

そして次に「絶壁と深潭（しんたん）、毒蛇と猛獣の
蟠居する原始林や、ともすれば足をとろうとする鳶かずら
あまつさえ剣を按じてしのび寄らんとする怪賊の気配、自
力聖道の路は嶮しかった。もうどうにもこうにも足の踏み
場も無くなったと思った刹那、先達の指示する方を見や
る、意外／＼その一方は森がすけて、未曾有の不思議な光景
が展開している。そうして細々ながら辿るべき道が―たし
かにかねて憧れの彼岸への道がいつている」

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と。

「これが法然上人の指図であり、親鸞聖人にとっての東岸

どき)を挙げるような、力強いのもしい心地。称えてい
るうちにフト気がついた、そしてうなずいた。これが信仰
かノそうだ、これが信仰だ、と。

〃私におきてはただ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと
よき人親鸞聖人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の子細なき
なり〃

これが私の大いなる受け入れであった。大きな受け入
れ、それは仏心の凡情への徹到であり引入であり、凡情の
仏心への開發であり投合である。時から云えば〃念仏申さ
んと思ひ立つ心の起るとき〃である」

とこう結んで居られるのであります。要は池山先生の
「大いなる受け入れ」という御文が、私に対する東岸の声
であって、又非常に御親切のお言葉であるということ、
あらためて味わ、されましたので、皆さん、御縁がありま
したら『仏と人』の最初のこの御文を静かに再びお読み下
さったならばと、お話をさせて頂いたわけであります。

(おわび)

前号の「一道会の記」の中、七頁下段の「船は本願、船
頭は廻向」のところ「船頭さんは如来」でありました。校
正の不注意でありました。

の声であり、白道であったのである」と述べていられる。
さらに先生御自身がお念仏に夜明けされた御自督を次の
ように誌されて私共を懇切にお導き下さっています。

「人から一ぱし信仰があると思われ、自分でも口に念仏
が出難いのは変だが、心には信心があるに違いないと思
込んでいたが、或る時、―それは私の四十二の時であつた
―犇々とせまりくる我身の影、煩惱の跳梁に驚いて、自ら
あざむいていた信仰にも見放されて、あゝ本当に信仰が欲
しい、どうしたら得られるだろうと、みどり児が母を探し
求めるかのように心も身もあけて、この一点に集中したと
き、フト胸に浮かんできたのが〃親鸞におきては……〃の御文
でこれが私にとって東岸の声であつた。私はその声に耳を
すました。思いをひそめた、引ったくるようにして御文を
見つめた。と同時に、不可抗的に引き寄せられたまま、御
文の中に没入したかの感があつた。ああノそうかノ聖人―
私の絶対無二に信頼を捧げている聖人―はそうされたの
か、じゃ私も……、じゃ私も念仏しよう、と思ひ切つて、南
無……と云いかけて、まだ阿弥陀仏と言ひ切らないうちに―
何のことはない、まるで光りの瀧でも浴びせられたような
気がして、続けざまに、高らかに、生まれてはじめてひと
りでの念仏が出るのであつた。何とも云えない、うれし
い、安らかな、大船に乗つたような、胸一抔に勝鬃(かち

徒然草 (九十三段)

「牛を売る者あり。買う人、明日そのあたいをやりて牛
をとらんとす。夜のまに牛死ぬ。買わんとする人に利あ
り、売らんとする人に損あり」とかたる人あり。

これを聞きて、かたえなる者の云わく、「牛の主まこと
に損ありといえども、又大きな利あり。その故は、生あ
るもの、死の近きことを知らざる事、牛すでにしかなり。
人また同じ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存
ぜり。一日の命、万金よりも重し。牛のあたひ鬃毛よりも
軽し。万金を得て一銭を失わん人、損あるべからず」とい
うに、皆人あざけりて「その理は牛の主に限るべからず」
という。

全 上 (百三十七段)

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか。雨に
むかいて月をこい、たれこめて春の行方しらぬも、なかあ
われに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、ちりしおれたる庭
などこそ見どころ多けれ。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

教信寺に詣でて

本尊も持たず
聖教も語らず
ただ念仏して
西方を
拝みし人

妻子を持ち
旅人の荷持ちをし
ただ念仏して
西方を
拝みし人

その人の寺に詣でて
ただ念仏あるのみ
ああ

その人こそは教信沙弥

ああ

その人の寺は加古の教信寺

親鸞聖人

常の御持言に

「我れは是れ

加古の教信沙弥の定

なり」

と――

浄土門

体験体験いうけれど

凡夫の体験アテにすな

おたすけは

ただ誓願不思議

「弥陀の誓願不思議に

たすけられまいらせて

往生をばとぐるなり」

体験ダノミは聖道門

誓願ダノミが浄土門

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

今もやつぱり

三十年まえも

煩惱と念仏

二十年まえも

煩惱と念仏

十年まえも

煩惱と念仏

今もやつぱり

煩惱と念仏

「されば

そくばくの業を

もちける身にて

ありけるを

たすけんと

おぼしめしたちける

本願のかたじけなさよ」

秋 彼 岸

秋彼岸

しみじみおもう

身のおろか

秋彼岸

ひとすじの道

ナムアミダ

わたしのだから

わたしのたからは

アホーがたから

アホーの一つおぼえ

ナムアミダブツ

あいもかわらず

ナムアミダブツ

主 治 医

わたしの主治医は

ナンマンダブツ

どんな病気も

ご相談
ナンマンダブツと
ご相談

わたしの主治医は
ナンマンダブツ
どんな病気も
ご診察
ナンマンダブツと
ご診察

わたしの主治医は
ナンマンダブツ
どんな病気も
ご投薬
ナンマンダブツを
ご投薬

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ
老人問題
わたしが老人

六十九才
わたしの問題
老人問題

家なし子なしで
病身で
自殺をおもう
ときもある

老人問題
まつ孤独
念仏なくては
生きられぬ
ナンマンダブツ
ナンマンダブツ
ほんとかナ
ありがたいと
いったら
どこかで鬼めが
セセラ笑った
〃ほんとかな〃
と

(昭和四十七年九月九日)

明日への不滅の希望

花田正夫

(註) 岡山県の愛生園の真宗同朋会で発行の「白道」へ寄稿をたのまれて早速筆を執りました原稿に、多少附記したものであります。

現在ウイン大学で精神科の教授をしていられるフランクルさんが、自序伝の中に、

「大戦の時、ユダヤ人であったためにドイツでナチスの言語に絶する迫害をうけ、仲間のほとんどは収容所で亡くなった。そうした中で私が生き抜くことが出来たのは〃明日への希望〃を失わなかったおかげである」

と述べている。同教授と親しくしていられる岸本鎌一先生に、フランクルさんの〃明日への不滅の希望〃とはどんな内容でしようかとおたずねすると、岸本先生はフランクルさんに直接にそのことをたずねられたそうで、

「それは、ユダヤの神への信仰であるが、それでは一般の人にわかり難いので抽象的(ちゅうしょうてき)に書

いた」
という返事だったとのことであった。私はユダヤ教を知らないからその消息を述べられないけれども、その超人的意志の強さに心うたれた。

さて、私共がたどる人生、五十年、百年の旅も生やさしいものではない。牧水は

幾山河越えざり行かばさびしさのはてなん国ぞ、今日も旅行く

と歎じ、九十六まで生きられた窪田空穂氏が
老いぬれば心のどかにありえんと思ひたりけり、あやまりなりき

と述懐していられるように、実に生死の苦海は果てしがない。自業自得、身から出た錆とはいえ、それぞれの業報は、兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりも、すこしの狂いもなく身にうけて行かねばならぬ。

こうした人生の業海（ごうかい）にあつて、何よりも持ちたいもの、否なくつてはならぬものは明日への不滅の希望である。不滅とは、その人の業報の如何を問はず、また他人の言動に左右せられず、且つは災難、病死によつてもさまたげられぬものでなければならぬ。

しかも、それが、優れた人、賢い人、徳の高い人のみが得られるのではなく、老少善悪、男女貴賤のへだてなく、さらに時処諸縁をえらばず、時代の流れも障えることの出来ないもの、言いかえれば、何人でも、何時でも、何処でも、行住坐臥を問はず、ただちに与えられる永遠の道でなくては私共のたのみとはならない。

ひそかに仰いでみれば、そうした一切の条件をのこらず成就して、念仏成仏の白道を、釈尊をはじめとし、三国七高祖方が入りかわり立ちかわり懇切にお勧め下さるのである。私共にとつてこれこそ唯一無二の不滅の希望である。

仏力に支えられる故に無碍で、障り多い身にさわりがさわりとならなくなり、本願に護念せられるが故に不滅で、本願をさまたげるほどの悪はなく、かえつて転悪成徳して下さる。それは私共の持ち合せの力の強弱を超えた世界で、仏願力の独壇場である。

嗚／＼私共は何という幸せであろうか、釈迦・弥陀二尊を慈父母と仰ぎ、浄土還来（げんらい）の観音・勢至の二菩薩

いみ仏は浄土に迎えて下さり、美しい仏のさとりをひらかせて下さるのです」

と、力をこめてお話ししたことを思い浮かべる。

たのまるるただ念仏のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ

の一首は、人生の種々の苦難の中にあつて、還暦を迎えられた時の池山先生の御述懐である。この歌を示されて

「歎異抄は腸詰めのように、段々と体験によつて生きた言葉となるものだが、この歌は、新年を迎え先ず仏前に合掌した時の心中をのべたものである。ことに本抄の第七章、念仏者は無碍の一道なり、そのいわれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなき故に無碍の一道なり云々の一言一句が体験として読めるようになった。ただし天神地祇とあるところは概念としてはわかるが、それ以上は味わえぬ……」

と言われたのちに、

「人間のよき理解者であるゲエテは、のがれられぬ苦労を逃げようとしたり、まだ来もしないことを取越し苦労しては吾々に二重三重の重荷となるから、それを待つて、

薩に護念せられ、地上ではよき人々の慈育をこうむつて、石・瓦・礫（つぶて）の如き凡俗の身をもつて、往生の望みと、成仏の暁を迎えさせていただけるとは、

私はかつて、身寄りもなく財産もない行路病者や、孤独の老人達の収容されている施設を時々見舞つた。そこには人として想像し得るかぎりのあらゆる人生苦にさいなまれて、身も心もカラカラに涸渇しきっている人達ばかりが身を寄せていた。

そこで先ず最近亡くなった人々の霊前に拈香誦経し、やがて皆さんにお願ひした。

「あなた方は、数知れぬ苦難の中をよくも堪えて、今日まで生きて下さつた。お察しするにあまりあることで、順調なお前がたにこの苦渋がわかつてたまるかと思われ

ることであろう。ただ、しかしここでお願いがあります。目があるじゃありませんか、まずみ仏をおがみましよう。手があるじゃありませんか、合掌しまししよう。口があるじゃありませんか、念仏もうしまししよう。そして聖人方と共に浄土への道をたどりましよう。

業縁にもようされては、肉親にさきだたれ、たとえ一切の人々から見はなされようと、飽くまでもお見捨のな

いと受けとめることが大切と云い、力の宗教を説いたニイチエは今一歩進めて、苦労はわが望むところであると敢然とそれに立ちむかえと教えている。

それらは勇ましく、すぐれたことではあるが、待つているとか、望むところであると云う風に業苦と対決する態度でなしに、念仏無碍のたのもしさに、さもあらばあれと、相手にしないで受けて越える道が最も力強い歩みである。不死身と云つてよいのか、のれんに腕押しでは、押す方が力抜けてしまふであろう」と、念仏のたのもしさを語られた。

又、夫婦じゃ、親子じゃ、兄弟・親友じゃと云つていても所詮は夢のうちのむつびである。

散るさくら、散るさくら、のこる桜も散るさくらと古人も警告している。こうした世にあつて、念仏の無碍道は、今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来生さとのまへのえにしを結ばせて下さる、そこに死を超えて往生成仏のさとりが保証されるのである。

歎異抄の四章に、自分の力をもとした人間の親切は行きつまることをとかれたあとに、

「浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うがごとく衆生を利益するをいうべきな

り」とあり、五章には、父母孝養の道もむつかしい煩惱具足の身でありながら

「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば六道四生のあいだ、いずれの業苦しめりとも、神通方便をもて、まず有縁を度すべきなりと云々」と聖人が仰言っている。天親菩薩の和讃には

願土にいたればすみやかに、無上涅槃を証してぞすなわち大悲をおこすなり、これを廻向となづけたりと、浄土からの還相の徳を讃仰していられる。

この本願のいわれを聞き、わが身にいただく時、罪障も無常も障ることの出来ない、明日への不滅の光が射しそめるのである。私共はとかく、死を外において、立派に生きる道を教えて下さるのが仏法であるとよく思いがちであるが、これだけでは所謂「世渡り仏法」に終ってしまふ。

かと云って生を粗末にせよというのではない、仏法の真面目は、生死を出ずるところにある。その道はわれら凡人が自分をたのんで果たし得る道ではないが、本願の大船に乗せていただく時、生死のはてしない苦海を横さまに超えて成仏への一筋道がひらけるのである。

「われこの利を見るが故に」と仰言る釈尊は「たとい三千世界に猛火が充滿すとも必ず過ぎて聞け」と切々とお勸め下さるのである。

△新刊図書紹介△

念仏詩抄

木村無相 著

定価 六百元 送料 八十円
発行所 京都市下京区花屋町通西洞院西入
振替 京都九三六番

自序

そのときどきのひらめきをそのままメモしたその中の

詩の形式のものうち

自分がえらんだ詩抄々です

ひとりよがりのものですが

領解といつてもよいでしょう

領解といつても

ソラゴト タワゴト

念仏のみぞ マコトにて――

念仏のみぞ マコトにて――

渡辺紋一 国手を悼む

聚墨生

一月廿一日夕刻、渡辺さんの奥さんから突然電話があり

「主人が心筋コウソククの発作でたおれまして、今度はお先に御無礼するかも知れないので御礼を云ってくれと申しております」との事を聞き、次の朝急いでお見舞いしました。奥さんと御令息方に付き添われて絶対安静中でした。私「大変だな、お会い出来てホッとしたよ」

渡「今度はどうもよくないところがあるのでネ」

私「御子さんが二人も医師になって附添い、君も医師なのだから、病気については万全をつくしていられるので、君の判断通りかも知れないね。しかしあとに残る身は淋しいから最後まで大切にしておくれよ」

渡「ありがとう。終戦後、仏法を聞く縁が出来たことが何よりだった。五十年前だったナア。六高に入った時、伯父が熱心な仏法者だったので、芝田徹心師を招いて法話をした。その時芝田先生から「六高には池山先生がいられる、歎異抄を身をもって読んでいる稀な人だから是非聞きたまえ」と云われた。その後生徒控室で歎異抄講話会の掲示を見たが縁が熟さぬと仲々聞けないものだなあ……。終戦後に地獄の苦におちてはじめて聞法の心がひらけ、池山先生の亡くなられたのちに、お著述などから

ようやく念仏させて頂けるようになった……」

私「大正十一年だから五十年近い前になるね、六高の南寮九室で同室の縁を持ったのは……。そして戦後に君は真剣な求道者となり、僕が心臓病やら腫瘍になって一方ならぬお心配をおかけしたのに、……しかし地上の縁は皆はかないね、お互いのこるものはお念仏の縁ばかりだなあ……。時に二十五日から三回、ラジオの人生読本で、生きることに死ぬこと、という題をもらって話すことになった、身体がよかったら聞いておくれよ」

渡「むつかしい題だなあ……明日録音するんなら大変だろう、聞かせてもらおうよ」

私「病気にさわるといけないから、これで失敬するが、お互にお念仏につながる身は、雲が月を消すことが出来ぬように、別れることはないんだね……」

渡「君も身体に気をつけて、さようなら……」
これが渡辺さんとの最後の会話となった。二十五日夕刻に奥さんから電話があり「再発作で亡くなりました、朝はラジオの人生読本を聞いてよろこんでおりましたのに」というお知らせをうけた。南無阿弥陀仏。

あとがき

五月は男児の節句、鯉幟があらちこちらにはためいておりますが、名古屋の空はドンヨリ曇っております。公害の問題も被害者意識ばかりで片付けられないで、共業(くごう)として、被害者であると共に加害者であることを省みて処して行きたいものです。

最近ことに聞いてニュースばかりが報道され、息づまる思いがいたしますが、近角先生の「濁世動乱と親鸞聖人」のお原稿を頂きました。大正七年の求道誌に掲げられたものであります。当時第一次欧州戦争のあと、漁夫の利を得た日本の濁乱は有名な米穀の買い占めによる生活難がおこって米騒動となりました。船成金の乱行は耳をふさぐ思いがしました。この時に、先生が、聖人の信念は「不倒翁」のたしかさが仰がれることを世に掲げて下さったもの一つであります。この聖人の真心が地をうるおす日を祈念してやみません。思えば本願念仏の道は、王舎城の大悲劇を機縁としてあらわれました。人の世の濁乱を悲しむ前に、かねてより矜哀される仏心の光明を我身に頂きましょ。

次に、大谷専修学院長の信国淳様からお許しを得て、「師を求めるところ」を頂きました。御自身の生活をそのまま打ち明け

て下さりながら、師にありよるこびを学院生と語られたもので、回を重ねて頂きます。「一道会の記」は私の話と、松本解雄様の述懐を記録して下さいましたものです。松本様は本年はじめに仏蹟を巡回されました。この秋の一道会にはその所感を聞かせて下さるでしょう。

木村無相さんの「念仏詩抄」の著書が刊行されました。詳細は二十三頁下段に記入いたしました。京都の文昌堂の方へ直接御注文下さい。

四月二日夜に高倉会館に出かけました。が、まず西山の浄住寺をたずね、満開の桜花の下に苔さびてきた池山先生の名号碑に参拝、榎原様御夫妻と談合数刻、ありがたいうちでして。私が病氣以来、一道会にまゐりましても急ぎ旅でゆっくり出来ませんでした。一期一会と茶道でも申しますが、こんな訪問は二度とあるまいと、老いの日のたのしみを満喫いたしました。

渡辺紋一様とお別れは惜しまれてなりません、私の病気をことの外心配して下さいました医師であり信友でありましたのに、当然私がさきに御無礼すると思っておりますが、あべこべであります。

明日の夜は照りますものと知りながら入るさの月の惜しくもあるかな

△御 案 内▽

- 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。南区駄町二ノ八八。一国会館、例会。
- 市電、新郊通り一丁目下車、東入ル、三筋目、左入ル二軒目。
- 毎月二十四日、午前、午後。昭和小桜町、教西寺、法話会。
- 市電、御器所通り下車。
- 市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂 志 郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七